

ノーベル平和賞受賞者

ムハマド・ユヌス氏をお迎えして

立教大学 総長補佐 笠原 清志



名誉博士号の学位授与

立教大学では、七月十一日（水）に池袋キャンパス・タッカーホールにて、ノーベル平和賞を受賞されたバングラデシユのムハマド・ユヌス氏（グラミン銀行総裁）をお迎えして本学名誉博士号の学位を授与し、併せて記念講演会を開催しました。当日は千百名をこえる参加者があり、NHKを含め十二社からの取材がありました。

二〇〇六年度ノーベル平和賞を受賞したムハマド・ユヌス氏は、一九四〇年にバングラデシユ第二の都市で

あるチッタゴンで生まれました。チッタゴン大学卒業後、母校の経済学部講師を四年間つとめた後にフルブライト奨学金を得て渡米し、ヴァンデビルト大学で経済博士号を取得し、中部テネシー州立大学助教授に就任しました。一九七二年に帰国し、政府経済局計画委員会副委員長に、その後、チッタゴン大学経済学部の学部長に就任しました。

一九七四年の大飢饉をきっかけとして貧困者の救済活動を開始し、一九八三年にグラミン（農村）銀行を創設しました。農村を中心に貧困者自立のための「マイクロ

クレジット」（無担保小口融資）制度を普及させ、今日では七百万人を超すバングラデシユの人々を極貧状態から経済的自立へと脱出させたといわれています。この制度は、今や国境を越えてアジアから援助が必要な全世界へと広がっています。このようなムハマド・ユヌス氏の業績については、アジアのノーベル賞と呼ばれるマグサイサイ賞をはじめ世界食糧賞、アガ・カーサン建築賞、日経アジア賞など数々の国際的な賞が贈られています。オスロのノーベル賞委員会は今回の平和賞授賞理由について、このように述べています。

「伝統的な平和は、大多数の人々が貧困から脱出する道を見い出せないかぎり達成され得ない。マイクロクレジットはその手段の一つである。人々をどん底から立ち上がらせることが、民主主義と人権の前進にも役立つものである」

ジヨブラ村にて 教室から実践へ

ユヌス氏の著作の多くは、一九七四年にバングラデシユを襲った未曾有の大飢饉からスタートしています。当時、ユヌス氏は、チッタゴン大学の経済学部長をしてお

り、その飢饉にはあまり気をとめていなかったようです。しかし、その後、まるで骸骨のように痩せ細った人達が、ダッカやその他の都市に最初は水がしたたるごくくゆつくりと集まり、その後は洪水のように押し寄せてきたとのことでした。

「飢えて集まってきた人たちは、何かを訴えてスローガンを掲げているわけではなかった。彼らは何も要求しなかった。彼らは声も立てずに私たちの目の前に横たわり、私たちが美味しい物を食べていようと、私たちを責めることはしなかった」

「人の死の方にはいろいろあるが、とにかく飢え死にはど悲惨なものはない。じつに悲しい死に方だ。飢え死にはスローモーションで起こる。一秒、一秒、生と死との間がどんどん小さくなっていくのだ」（ムハマド・ユヌス自伝）早川出版、一九九八年刊より。

ユヌス氏は、すさまじい飢餓の現実を目の前にして、自分が教えていた経済理論がどれだけ現実から乖離したものであったかを痛感した。そして、大学を一步出ると、バングラデシユの農村には、善人も無慈悲に打ちのめされ、踏みつけられ、そして貧しい人々がますます貧しく

なっていく現実が存在していた。そして、彼は教え子と共に、大学の近くにあるジョブラ村の貧しい家庭を訪問し調査を開始しました。

この調査で、彼は「朝から晩まで働いても悲惨な極貧状態から抜け出せない」世界中に数えきれないほどいる女性の一人、ソフィアという女性と知り合うことになりました。彼女は、多くの女性達がしていたように高利貸しからお金を借り、竹細工の原料を買ってその製品を関連の業者に売っていました。土地を担保にした場合も同様のメカニズムで、借金した者はほんのわずかな借金を返すだけで、また借金をしなければならなくなる。そして、彼らがこの悪循環から解放されるための手段が「死」であつたというわけです。

このような状況の中で、ユヌス氏は「マイクロクレジット」という少額の無担保融資により貧しい人々の経済的自立を促す事業を行う「グラミン（農村）」銀行を創設する事を決意しました。そのやり方は担保となる資産や土地のない、特に女性を対象に少額のお金を融資するとともに教育も行うというものでした。そして、融資を受けた人が銀行に向くのではなく、銀行員が借り手のところに直接出向いて融資をするという、従来の経済理論や銀行のあり方とは全く異なるものでした。

ている現場を見学しました。その時には、借金も返し終わり、鶏の数も百羽近くになっていました。そして、今後は稼いだお金でキオスクか小さなレストランでも運営したいと言っていました。私がインタビュした二人の女性は、「今まで、いつも夫に殴られていたが、最近はお夫がやさしくなった。」と笑いながら言っていました。私の「それは、なぜですか？」という問いに、「やはり、私達がお金を持つようになったからかもしれません。」と答えてくれました。どれだけ崇高な人権宣言や男女平等を目指す法律があろうと、ロマの女性達の社会的地位、とりわけ家庭内での地位を高めることは困難でした。しかし、ロマの女性達は、「マイクロクレジット」のシステムによりお金を借り懸命に働き経済的に自立した瞬間、家庭内の自らの地位に大きな変化が生じたことに気付いたのです。

この事は、私にとっても大きな驚きでした。ユヌス氏の提案した「マイクロクレジット」のシステムは、貧しい人々に「お金や物をあげるのではなく、お金を稼ぎ、物を得る方法を教える」ということかもしれません。地震や災害の場合は別ですが、人は援助を受けることによって依存心が強くなり、援助してもらおうことを当然と考えてしまい、自らの足で立ち上がれなくなってしまうこ

ハンガリーの「ロマの女性支援」プロジェクトから

私は、この十五年間、ある財団のポーランド、ハンガリー、チェコ、そしてスロバキアの中欧諸国支援の活動を行ってきました。活動の目的は、民主化と市場経済の導入をサポートするために、草の根の民主主義を担いつつあったこれらの旧社会主義国のNPOやNGOを支援することでした。その支援活動のために、ハンガリーに何回も行き、地方や農村、そして当地のNPOやアメリカの支援財団のスタッフとも議論する機会がありました。

彼らが支援しているプロジェクトに「ロマの女性（ジプシー）」は蔑称で、現在はロマと表現される「支援」プロジェクトがありました。十万円ぐらいの金額のお金を、五人でグループを組んだロマの女性達に融資し、彼女達は、五十羽ぐらいの鶏を買い、それを飼育しとれた卵を市場で販売するというプロジェクトでした。私は、当初、このプロジェクトの背後にある考え方が、ユヌス氏の「マイクロクレジット」であることを知りませんでした。また、このプロジェクトの効果や意味についても懐疑的でした。二〇〇一年の夏、現地のスタッフと一緒に、彼女達が子供と一緒に家の近くの野原で鶏を飼育し

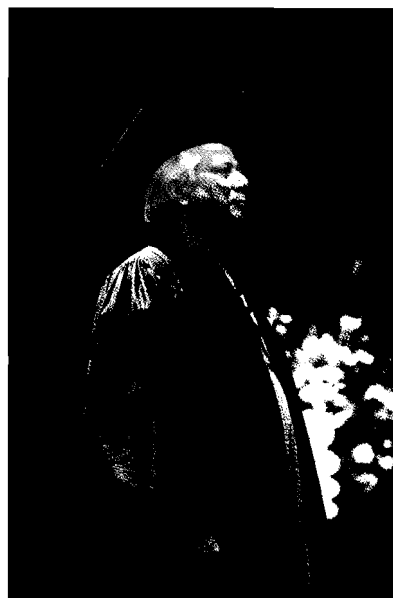
とがあります。自らの生活を自らの責任と尊厳によって切り拓くことが大切であり、またそれを援助することこそ本当の援助ではないかと思ひ始めました。

その後、私はこの「マイクロクレジット」のシステムとそれを提案し、現実にバングラデシユの貧困に三十年近く立ち向かってきたユヌス氏の活動に注目してきました。幸い、立教大学の全カリの授業を担当していたナシル・U・ジョマダル氏が、ユヌス氏の二十年来の支援者であるということを知りました。昨年十月にナシル氏の仲介と努力によって、ユヌス氏との連絡が可能になりました。私は、立教大学がユヌス氏の協力を得てNPO・NGOの活動においてアジアの人材育成、そして貧困撲滅も含めた多様な社会活動を展開していきたい旨を伝えました。このようなプロセスを経て、今回外務省の招へいプログラムで来日したユヌス氏の立教大学での名誉博士号の学位授与と記念講演が実現しました。私にとっては、ハンガリーの農村で貧困から自力で脱出したロマの女性達に会い、その素晴らしい笑顔に出会ってから六年の歳月がたっていました。

ユヌス氏の業績

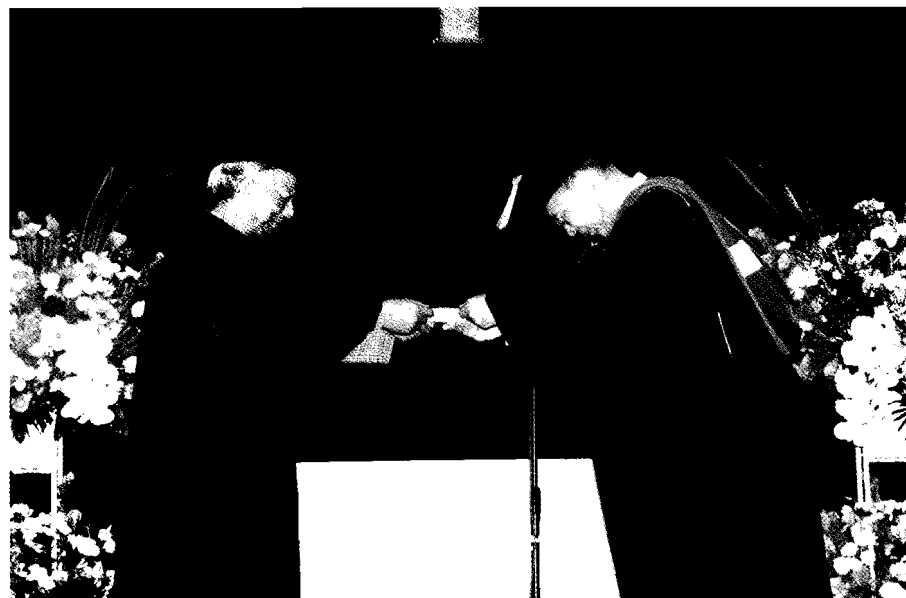
ムハマド・ユヌス氏の業績は、貧困を民主主義と人権

七月十一日、立教大学は、二〇〇六年にノーベル平和賞を受賞したバングラデシュのムハマド・ユヌス氏をお迎えし、本学名誉博士号（ドクター・オブ・ヒューマニティーズ）の学位を授与いたしました。ユヌス氏は、一九八三年にグラミン銀行を創設し、貧困の中にある人々に無担保で少額融資を行う「マイクロクレジット」制度の普及を通じて、七百万人を超すバングラデシュの人々の経済的な自立に多大な貢献をされています。名誉博士授与式にご出席いただいたユヌス氏には、ご自身のグラミン銀行運営の経験から、日本の若者たちに向けた記念講演を行っていただきました。



を否定するものとし、それからの脱出のため、人々の人間性と尊厳に依拠した「マイクロクレジット」という手法を作り上げたことです。この制度に基づくグラミン銀行は、バングラデシュの六千に近い村々に設立され、合計約千七百の支店を持つ金融機関として成長しています。

本学は創立以来、キリスト教に基づく教育と人権の尊重、共生そして平和という理念をその教育と研究の基礎においてきました。ムハマド・ユヌス氏は、極貧の人々でも自らの力で立ち上がる力のあることを示し、人権の尊重、共生そして平和という人類の普遍的価値の実現に貢献しました。ムハマド・ユヌス氏に、本学からドクター・オブ・ヒューマニティーズの名誉学位を授与したことは、本学の理念と歴史に鑑みてまことにふさわしいことであつたと思います。また、このことは、本学における日本とバングラデシュとの交流を促進し、本学の教育研究における国際化の展開にも大きく寄与するものと思われま



採録

グラミン銀行総裁 ムハマド・ユヌス氏
名誉博士学位授与式 記念講演

「二十一世紀の日本の若者へのメッセージ ～グラミン銀行の経験から～」

日時 二〇〇七年七月十一日（水）

十三時三十分～十五時三十分

会場 立教大学 池袋キャンパス・タッカーホール

通訳 倉沢 幸（愛知学泉大学教授）

若者たちが私の活動に勇気をくれた

今日は皆さんにご出席いただき、大変うれしく思っております。バングラデシュの人々、私個人、そしてこの場にいる私の娘モニカからも、心から御礼の言葉を申し上げます。名誉博士号の学位をいただき、立教大学の一員である喜びを教員や研究者の方々、そして学生の皆さんと共有できることを光榮に思います。そしてこのことが私やグラミン銀行と、この大学で学ばれる皆さんとの関係をより深め、お互いの目標に向かって協力しあえるよい機会となることを願っております。

皆さんのような若い力をもつ方たちと出会うことができ、今日は非常に勇気づけられました。実は私の仕事も、若い人たちとの出会いから始まったものです。大学で学生達と一緒に活動し、彼らから勇気をもらう中で現在まで進めて参りました。

私たちが活動を始めようとした当初、活動のための写真を持っていませんでした。「何をすればいいのか」が、全く分からなかったのです。しかし、「何をしたいか」は、はっきりしていました。貧しい国で、貧しい人々の手助けになるようなことをする。その目標だけは、非常に明確だったのです。

幸運なことに、私が教えていた大学の周りには四つの村がありました。そしてしばしば学生たちと村に出かけ、村人たちの生活を自分たちの目と耳で確かめました。村人からいろいろな話を聞き、私たちも話し、彼らの仕事を一緒に行ってみるという試行錯誤の中から、私たちの活動の形が少しずつ生まれてきたのです。当然、その時は現在のような大きな規模になるとは、夢にも思いませんでしたが。

村のあちらこちらを訪れる中で、私たちは貧しい人にお金を貸している人と出会い、彼の融資リストを手に入れることができました。そのリストによると、お金を借

りている村人は四十名もいたのですが、その総額はわずかに四十ドルでした。極めて少額なお金ですが、それを借りたという多くの人がいたのです。このことを知った時、私はこう考えました。「このような少額のお金ならば、もしかしたら自分のポケットから、とりあえず貸すことができるのではないか」と。

このようにして融資の活動を始めた後、お金がより円滑に回って、多くの人々がお金を借りられる状況を作ることとはできないだろうか考えました。そのためには私個人との関係ではなく、なんらかの制度的な仕組みが必要で、そう考えた私は、銀行と話し合いを持ったのですが、銀行には「いや、そのような貧しい人々にお金を貸すことはできない」と、断わられたのです。銀行とは一種の断絶状況が生まれてしまい、では、他の形でどのような資金作りが可能だろうか考えたことから、今日のグラミン銀行に繋がる活動が具体的になっていったわけです。

知らないからこそ、大きな可能性がある

活動は、「銀行が手を差しのばさないならば、私が責任を負う」という形でスタートしました。「私が責任を

負う」とは、銀行から私がお金を借り、すべての書類にサインをするなど法的なお金の借り手となり、そして貧しい人々には私からお金を貸す、ということなのです。私が間に入ること、銀行は融資を約束してくれたのですが、それでも銀行は、「これは危ない道に進んでいるのではないか」という懸念をもっていました。彼らから盛んにいわれたのは「貧しい人は、貸したお金を返してくれないだろう」ということです。しかし、実際には彼らは私にお金を返したのです。その姿を見て私は非常に勇気づけられ、この活動を制度としてさらに定着させていこうと考えました。

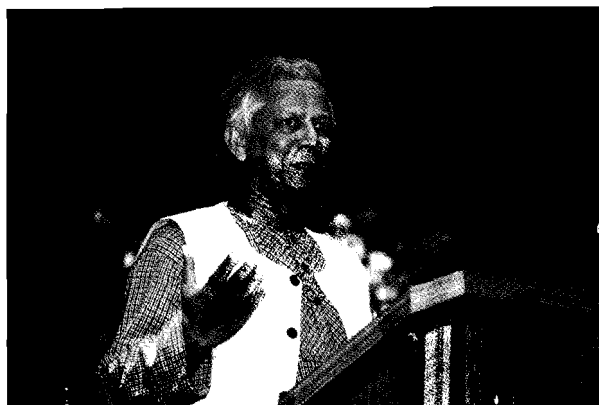
これまでお話しましたように、私たちの活動がある程度うまくいくようになって、銀行からは「これは絶対に危ない」「絶対に破綻します」といったことを何度も忠告されました。彼らを毎回説得することだけで、時間が無駄になってしまいます。そういったことを繰り返すのならば、私自身が新しい銀行を設立したらどうかと考え、一九八三年にようやくグラミン銀行をスタートさせたのです。

グラミン銀行をスタートするにあたっては、一九七六年に村を連れて歩いた学生たちがみんな参加してくれました。彼らが銀行の運営に、責任をとってくれたのです。

ですからこれは私が始めた銀行というよりも、学生たちと村人たちの出会いの中から、彼らが動かしてくれたものです。現在、銀行は非常に大きくなりましたが、彼らは幹部として銀行を順調に運営してくれています。

なぜ、このようなエピソードを皆さんにお話したかといえは、「仕事とは、知らないからできないというものではない」ということをお伝えしたかったからです。私も銀行について

まったくの素人でしたし、私の学生たちも知りませんでした。けれども、銀行を運営するということ、一度決めた以上、そのためにみんなで全力を尽くせば、できない仕事をうまくやれるということが分かったわけで



す。皆さんにも是非考えていただきたいのは、「知らないからできない」ということでは、前進は何もないということですから。むしろ未知の世界に飛び込み、自分は何がしたいのかを前向きに考えて、行動を起こしていくということが必要ではないかと思っています。

銀行が徐々に大きくなると、人を雇う必要が生まれ、求人広告を出すということもやってきました。その時に条件をつけたのは「銀行での業務経験のある人は申し込まないでください」ということです。銀行で勤めている人たちの経験というのは、グラミン銀行とは関係がありません。私たちは普通の人間として、この銀行を運営していきたい。私たちは庶民であり、庶民と一緒に頑張って働ける人というのが、採用の大きな条件でした。

重要なことは、「物事を知らないからできない」のではなく、「知らないからこそ逆に幸運である」ということもありえるということです。仕事のやり方を知っている人は、その範囲でしかものを考えないということがよくあります。やり方を知らなければ、それがために新しい発想が生まれ、普通では考えられないようなことを試みるかもしれません。そのようなプラスの要因を、強調しておきたいと思います。銀行というのは世界中で、何百年とこれまでのやり方で機能しました。そうした方々

には、私たちのやり方がなかなか理解しにくい。実は今でも理解されていないだろうと、私は感じています。

貧困は個人ではなく社会制度に起因する

さまざまな疑問が浮かぶ中で、もっとも大きなものは、「人間はなぜ貧困になってしまうのか」。このような非常に根本的な問いです。貧困というのは、その人自身に由来するものではない。その人の性格によるものでもありません。私たちが作りあげた社会の仕組みや、その基準、ルールによって外から押しつけられるものです。つまり貧困とはその人自身にあるのではなく、社会から課せられたものであると私は理解しています。

貧困である人と、裕福である人は、人間として違いはありません。同じ性質、同じ可能性をもっているのです。路上に生活している人にも夢があり、可能性があるはずですから。にもかかわらず、なぜ彼らが貧困に晒されているかといえば、それは私たちが作りあげた制度、状況の中から抜け出せないからです。そこには我々自身が、彼らを貧困に押し込めているという側面もあるような気がします。

皆さんもご存知のように、世界の半分の人々は貧困に

晒されています。これだけの数の人々が貧困であるということは、我々がこれを真剣に取りあげず、解決策を見出していないということでもあります。もし、彼らにお金があれば、より大きなお金を引き寄せることができるでしょう。資金があれば、それを元手にもっと大きなお金、あるいは財を手に入れる機会が生まれるのです。しかし貧困の中にある人たちには、そのような小さな資金ですら手にすることが出来ない。そういった制度を私たちは作り上げてしまっているのではないのでしょうか。

この制度の基本にあるのは、商業というコンセプトです。私たちはいわゆる利益主義に非常に重点を置いた制度を作り上げたのではないのでしょうか。このような制度の中で、企業は利益を最優先にして考え、利益以外の価値観の追求は二の次となります。そして利益中心の考え方は、我々の社会のすべての制度、あるいは我々自身の考え方に定着したものとなっている部分もあると思います。

企業というのは、人間を利益追求の道具として使うことが宿命づけられています。だからといって、「人間が存在する価値とは、お金を生み出すことだけだ」と考えていいのかどうか。そのことをよく考える岐路に、我々は立っているのではないのでしょうか。お金を稼ぐことは

人間の追求する行為の一部でしかないはずなのに、それが拡大され、あたかも人間全体の宿命のようになっていきます。そこが問題なのです。

想像力こそが、世界を変えていく力

お金を稼ぐという利益追求の活動が、我々の生活の基盤だということになっていますが、実はもうひとつの基盤がありうるわけです。それは社会的な利益のための活動です。そこで皆さんに少し立ち止まって考えていただきたいのは、我々の心の中には、お金を儲けたいという思いの一方で、社会のために何かをしたいという思いもあるということです。お金を稼ぐことに集中したい人は、それもいいでしょう。あるいは社会活動に集中したい人は、そうすればいい。けれども、両方の側面を一人ひとりが持っているのであるなら、どちらかの活動に集中せず、両方を合わせることもひとつの手段としてありうるわけです。

大学で私たちは何を教え、何を学んでいるでしょう。例えば経営学部で学んだ学生には、経営学の学士号を与えます。そこでは、いかに企業が利潤を高め、利益を上げるかという理論や方法について、集中して教育を行っ

てきました。しかし経営学部があるのと同様に、社会利益経営といった学部、学科があってもおかしくはないでしょう。そこでは社会の利潤、利益を増やすための手法を学び、それを社会に生かすことを学びます。そういった学問的な側面を大学が持つこともひとつの考え方です。また、このような社会的利潤のための経営というのは、誰もができるものです。政府のお世話にならなくてはできないということは、まったくありません。我々が自立し、一人ひとりの人間の行動によってそれを起こすことができます。

私たちはどのような世界、地球を求めているのか。それは私たち自身が考えなくてはならないことです。いまの世界のあり方で、私たちは満足なのでしょう。世界の人々の半分が貧困に晒され、さまざまな場所で戦争が起っています。そして原子力利用の問題、核拡散の問題、さまざまなことが起こっています。そのような世界を、我々は求めているのか、それとも何か別の世界はあるのか。それを考えるのは、私たち自身です。私たちの心なのです。私たちは何を求めているのか。一人ひとりが世界の将来像を考え、自分は何をするのかを考える小さな行動が、皆さんが心に描いている世界につながると思います。

質疑応答

◆聴衆1 日本の若者の発展途上国に対する関心の向け方や、かわり方について、ユヌスさんはどのようなことを望まれていますか。

◆ユヌス氏 新しい考え方を持つことだと、まずは申し上げたいです。学生であるならば、社会的利潤ということとを念頭に何か事業を興すことを考えてみるのもひとつの方法だと思います。私だったら何ができるか、自分ではできなくてもこんなことをやってほしいということを、ビジネスとして社会に提示してみるのです。それを例えばインターネットで公表することにより、賛同者が出てきたり、企画が磨かれて実行可能なものになっていく場合もあるでしょう。

強調しておきたいのは、「知らない」ということが、逆に大きな可能性をもっているということです。知らないからこそ調べ、自分としての考えが固まります。そして誰も考えなかったような、新しい発想から提案ができます。

◆聴衆2 ユヌス博士は高校時代をどのように過ごされ、どのような夢を描いていましたか。また学生生活に

重要なことは、この地球はあなたの地球だということです。あなたに責任がかかっています。あなた自身の地球を、あなた自身はどうしたいのか。それを考えていたきたいのです。誰かがうまくやってくればいいという、利己的な考え方はいけません。あなた自身が考え、行動する主役なのです。そしてこれは、そう簡単なことではありません。それでも、「この地球は私が住む、私の地球だ」ということを考えた上で、何をしたいかを考えることはできます。答えは分からないけれど、リストアップしてみましょう。書いてみましょう。それを自分の部屋に貼って、毎日見つめてみることです。そこにはまだ、答えはありません。やり方も分かっています。けれども、自分の将来像、地球の将来像ということを何らかの形で今から考えることは可能だと思います。

つまり自分の想像を発展させていくということが、非常に重要なことです。いかにいろいろなことを想像できるか。それを自分の将来において実現させていくものとして考え、未来に繋げていくか。想像力こそが、多分これからの私たちの求めたい、あるいはやりたいことに一番必要なものではないでしょうか。想像力を是非とも皆さんに育てていただきたい。そのことを願って、私の話を終わらせていただきます。本日はありがとうございました。

経験されたことで、いまのご自身に繋がっていることがあればお教え下さい。

◆ユヌス氏 私が高校にいた頃、バングラデシュの貧困はもっと厳しいものでした。そういった中でまっ先に考えるのは、どのようにしてこの貧困から脱皮するかということであり、その目標はどの学生にとっても明確でした。ただし従来の教育制度からは、その答えは出てきません。従来の社会システムを教え、それを維持することを目的とする教育には、世界を変える新しい発想は組み込まれていなかったのです。



先生教えて！はじめて学ぶ 会計のしくみ

(唯学書房・1575円)

大橋 英五(総長、経済学部教授)著

えんぴつで脳を鍛える 竹取物語

(宝島社・880円)

小嶋 菜温子(文学部教授)著

ダイエット&フィットネスの基礎知識

(ハートフィールド・アソシエイツ・1575円)

杉浦 克己(コミュニティ福祉学部特任教授)著

ひと組5分で読める 音楽家カップルおもしろ雑学事典

(ヤマハミュージックメディア・1680円)

萩谷 由喜子(経済学部卒)著

プリズム

(新潮社・1575円)

野中 稔(法学部卒)著

句集「抱く」

(幻冬舎ルネサンス・1470円)

松永 みよこ(文学研究科修了)著

エンターテインメント！

(朝日新聞社・1680円)

青山 真治(文学部卒)著

＜編著・共著・訳書＞

昆虫の食草・食樹ハンドブック

(文一総合出版・1260円)

森上 信夫(本学職員)他著



■ムハマド・ユヌス氏

【プロフィール】

1940年、バングラデシュ・チッタゴン近郊に生まれる。1960年チッタゴン大学経済学部卒業、1961年同大学大学院にて経済修士号取得。1965年フルブライト給費留学生として米国のヴァンデビルト大学留学、1969年同大学でPh.D.取得。後、中部テネシー州立大学助教授を経て、1971年に帰国。チッタゴン大学経済学部教授。1983年グラミン銀行(農村の銀行)を創設し、総裁として今日に至る。ユヌス氏は「マイクロクレジット」(無担保小口融資)という独自の思想とシステムを立案・実施。伝統的な銀行がこれまで融資することのなかった貧困の中にある人々に無担保で融資を行い、経済的な自立や所得の向上を促した。その功績に対して、2006年度「ノーベル平和賞」がユヌス氏並びにグラミン銀行に贈られた。

皆さんが生活している状況は、それとはまったく違います。何が違うかといえば、瞬時に物事を知ることができるということです。我々の時代には、知ることに相当な時間がかかりました。皆さんはさまざまな手段によって知らないことを知ることができ、そこから新しい発想もできる、非常に恵まれた状況にいると思います。

◆聴衆3 グラミン銀行の仕組みには、まず貧しい人々を信頼するという考え方があってと思います。しかし実際の社会では、人と人、国と国が信頼しあうのは大変に難しいことだとも感じています。信頼を築いていくために大事なことは、何でしょう。

◆ユヌス氏 信用というのは、社会の中にもともと存在

するものです。それを我々が少し高めることができたのは、ひとつのフレームワークを提示することで、信用を上手く利用することができたからです。

現代社会あるいは国家は、人と人の相互的な関係や地域的な関係といったものよりも、法的なフレームワークでものを考えます。法的なフレームワークとは、信用というものを非常に曖昧にしまわうものでもあります。一方、我々は法的な枠組みを追求せず、むしろ個人としての、人間としての繋がりを大事に考えました。そしてそのような社会的なフレームワークを制度の中に組み込みました。つまり、私が人々を信用したというよりも、社会にもともとある信用を維持するシステムを作ったといえるでしょう。それは十分に役割を果たしたのです。